

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520237

研究課題名(和文)近世前期における九条家蔵書の復元とその文献学的研究

研究課題名(英文)Restoration and its literature studies of Kujo home collection in the early modern period the previous fiscal year

研究代表者

石澤 一志 (ISHIZAWA, KAZUSHI)

国文学研究資料館・研究部・特任助教

研究者番号：30507752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：近世前期、寛永時代(1624～1644)を中心とした、撰家相続流・九条家に於ける蔵書の状況と書写活動に関する研究・調査を行った。その結果として、当時の九条家の当主であった、九条道房(1609～1647)が行った、蔵書整理の実態、および新たな蔵書形成のための書写活動の詳細を明らかにすることが出来た。

九条道房は室町時代までの歴代当主の書写本を整理・確認し、その確認年次を奥書に記し、新たな書写したものに関してはその伝来および書写年次を奥書に記しており、それらを調査した結果、寛永十六年から二十年前後にそれらが集中して行われたことが明らかとなった。また、所々に所蔵される九条家旧蔵本の所在を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Early modern period the previous fiscal year, with a focus on Kanei era (1624-1644), was carried out research and surveys on the status and Shosha activities of books in the Sekke inheritance flow-Kujo home. As a result, it was a family head at the time of the Kujo family, Kujo Michifusa (1609-1647) went, it is possible to clarify library organize realities, and details of Shosha activities for the new library formation It was.

Kujo Michifusa is to organize and confirmed the Shosha this successive family head up to the Muromachi period, and noted the confirmation annual to Okugaki, with respect to those new Shosha has noted its legacy and Shosha annual to Okugaki, results of the examination thereof, it was revealed that they were carried out focused around twenty years from 1639. Also, we have to clarify the whereabouts of Kujo house old stock that is holdings in some places.

研究分野：日本文学

キーワード：書誌学 歴史学 文献学 蔵書形成

1. 研究開始当初の背景

五撰家の一つ、九条家の蔵書は、鎌倉時代以来の当主により形成された貴重なものであったが、昭和初期に行われた売立等により巷間に流出し、諸家に分蔵されることになった。最初の大規模な売立である昭和4年(1929)時の様子は、反町茂雄の証言(『一古書肆の思い出』)に詳しいが、それによれば、旧撰家の蔵書の売立ということで、諸方面から非常に大きな反響があったという。中でも話題となったのが、『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』の2書で、幻の逸書の出現に多くの注目が集まった。この書は国文学者の金子元臣が入手するところとなり、現在は国文学研究資料館に寄託されている。この他にも多数の作品が売立に付されたが、それらは九条家本として学会に報告され、その後の研究に多大な新見をもたらした。加えて近年新たな事実が明らかになった。国文学研究資料館所蔵初雁文庫本(西下経一旧蔵)の物語『とりかへばや』と前出『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』とが同一筆跡であることが新美哲彦(連携研究者)により指摘された。これらは非常に特徴的な筆跡を持つだけでなく、装訂も近似し「九条家本売立入札目録」(『反町茂雄 収集 古書販売目録精選集』ゆまに書房、2000)の中に見出されることから、すべて九条家旧蔵本であることが判明した。さらにその後、その指摘を承けた石澤(研究代表者)が、鶴見大学が所蔵する『浜松中納言物語』および天理図書館蔵『源承和歌口伝』が上記3書と同一筆跡であることを発見し、また佐々木孝浩(研究分担者)が、京都大学附属図書館蔵中院文庫本『古今集注』および早稲田大学中央図書館蔵『歌合集』も、これらと同筆であることを発見した。これらのうち、『とりかへばや』『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』『源承和歌口伝』『歌合集』は、筆跡・装訂などから九条家旧蔵本であることが明らかであり、それ以外のものも、同一筆跡であることから判断して、他の九条家本とは密接な関係が想定される。

2. 研究の目的

五撰家の一つ、九条家が所蔵していた蔵書群、とりわけ近世前期の当主・九条道房により行われた書写活動に焦点を当て、それを復元しつつ、その形成に関わる書写活動の実態とその意義を明らかにすることを目的とする。道房が精力的に行った書写活動と、それを支えた実働部隊である、複数の右筆たちによって行われた書写活動を解明する。九条家本として巷間に散在する写本の所在を追跡し、把握するという、基礎的作業もを通じてその全体像に迫り復元を試

みる。そこから、近世前期の典籍の流通経路や当時の学問的ネットワークの様相を可視化を目指す。また、それらの底本・原本へ遡及し、中世写本と九条家の繋がりに光を当てることも目指した。

3. 研究の方法

九条家旧蔵本の書誌学的調査を網羅的行った。現在、確認されるところの所蔵先には、主として、宮内庁書陵部・天理大学附属天理図書館が挙げられる。それらに所蔵される九条家旧蔵本を、目録等より列挙した。その後、それらを基に、一点ごとに資料の書誌学的調査(装訂・大きさ・紙質・筆跡・墨色等)を行った。また、内容的な調査と伝来に関する調査(奥書等より判明する、書写伝来経路、書写年次等の情報の収集)を行って、蔵書形成の詳細を明らかにし、蔵書の全容についても解明を目指した。また、上記二箇所以外にも、各所蔵機関に所蔵されることが判明したものについて、順次調査を行った。結果、鶴見大学図書館・慶應義塾大学図書館・慶應義塾大学附属研究機関斯道文庫・早稲田大学図書館・国文学研究資料館・東海大学附属図書館・広島大学図書館・島根大学附属図書館に所蔵されている九条家旧蔵本について書誌学的調査を行った。また、それらに関する文献学的調査も併せて行った。調査の結果をデータとして集積し、リストに纏めた。同時に、調査に際し重要と思われる資料、同一筆者による書写と認められる、一群の典籍に関して、その書影を撮影・複写し、その画像を印刷して収集した。またそれらをデジタルデータ化し、比較対象研究を行った。

4. 研究成果

近世前期、寛永時代(1624~1644)を中心とした、撰家相統流・九条家に於ける蔵書の状況と書写活動に関する研究・調査を行った。その結果として、当時の九条家の当主であった、九条道房(1609~1647)が行った、蔵書整理の実態、および新たな蔵書形成のための書写活動の詳細を明らかにした。

九条道房は、鎌倉時代初めに成立した九条家の、鎌倉時代以降、南北朝時代および室町時代までの歴代当主の書写本および蔵書を継承したが、それらを自らの手で整理・確認し、その内容について実見調査した後、確認年次を本の奥書として記している。これらにより、九条家歴代の書写活動および、筆跡等が明らかとなっている。同時に、書写伝来した典籍のうち、重要な伝本が多々あることが判明している。

また、道房が新たに書写したものに関してはその伝来および書写年次を本の奥書に記している。それらを調査した結果、寛永十六年から二十年前後にわたり、それらが集中して行われたことが明らかとなった。その理由として、寛永二十年に時の天皇であった、後光

明の即位の礼があり、当時左大臣であった九条道房は、その式全体を執り行い、進行すべき立場にあった。よって、その準備として儀式典禮の様々、特に即位式に関する一連の有職故実の古典籍・資料類について関し、その内容を理解・把握しておく必要があった、ということが挙げられよう。同時にそれに伴う形で、古記録・日記等も多数収集され、九条家の始祖・九条兼実の日記『玉葉』に関しては、この時に整理され、また新たに書写されて、九条家から出て、二条家へと移った康道へと譲渡されたことなども知られる。重要な事跡として注意される。またさらに、弟に当たる、栄厳を通じて、小野随心院および東寺から、仏教講式の相当数を貸借・書写していることも明らかとなった。さらに、文学作品を多く新写し、その蔵書の充実に努めていることが明らかになった。これらは、江戸時代前期の宮廷並びに公家における、盛んな書写活動と密接な関係を持つものと推測されるところである。

これらの書写活動は、道房自身の手により書写されたものもあるが、その多くは、複数の右筆の手により書写・校合等が行われている。これらを調査したところ、それらはかなりの数量に上ることが判明してきた。それらをまとめ通観したところ、その書写活動の時期と期間が次第に明確になってきた。古くは寛永の中頃から見られ、下って新しいところでは、道房の存命中に止まらず、次代当主の寛文年間にまでまたがる、相当長い期間にわたり、右筆として奉仕・活躍したらしいことが知られる。また、九条家のみならず、他所における書写活動にも従事しているらしいことが推測され、特に中心的に活躍したと見られる筆者の一人については、その特異な筆跡と相俟って、その書写した典籍の数量が多数であることから、その伝を明らかにするべく調査を行ったが、残念ながらその姿を明らかにするまでには至らなかった。今後とも調査を継続したい。とはいえ、その書写活動の中心は九条家であり、かつその活躍時期も、寛永年間、特にその後半に集中して見られることが明らかになったことは、重要であろう。

また、九条家の蔵書は近代になり、売却・譲渡され、各所に分蔵されるに至ったが、その過程について、これまで知られていたよりも、早い段階からそれが行われて始めたことを、売立目録の発見から跡づけた。これもまた、蔵書の伝来過程を明らかにするために、重要な事実であると思われる。

そして、所々に所蔵される九条家旧蔵本について、九条家以後の伝来を中心に考察した。近代以降の研究者が、九条家伝来のそれら古典籍をどのように継承し、研究に利用したかについて、明らかにした。一例を挙げると、源氏物語研究で著名な、池田亀鑑がいかに九条家本に注目したのか、その入手に執心したかを明らかにした。そして入手した古典籍のいくつかについて、池田亀鑑以後の足取りを

辿り、現在の所蔵先とそこに至るまでの経緯を明らかにした。
以上の内容を含んだ成果は、雑誌論文・著書として発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

石澤一志、九条家旧蔵本の行方 池田利夫「祖形本『浜松中納言物語』の写し手は誰」続々貂、これからの国文学研究のために、笠間書院、査読なし、1巻、2014、159 - 188

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

久保木秀夫、『栄花物語』主要伝本類概説、王朝歴史物語史の構想と展望(加藤静子、加藤宏徳編、の内)、新典社、2015、704
石澤一志、風雅和歌集 校本と研究、勉誠出版、2015、576

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石澤 一志 (ISHIZAWA, Kazushi)
国文学研究資料館・研究部・特任助教
研究者番号：30507752

(2) 研究分担者

中川 博夫 (NAKAGAWA, Hiroo)
鶴見大学・文学部・教授
研究者番号：70211414

佐々木 孝浩 (SASAKI, Takahiro)
慶應義塾大学・附属研究所斯道文庫・教授
研究者番号：20225874

(3)連携研究者

新美 哲彦 (NIIMI, Akihiko)
早稲田大学・教育学部・教授
研究者番号：90390492

海野 圭介 (UNNO, Keisuke)
国文学研究資料館・研究部・准教授
研究者番号：80346155

久保木 秀夫 (KUBOKI, Hideo)
鶴見大学・文学部・准教授
研究者番号：50311163

小山 順子 (KOYAMA, Junko)
国文学研究資料館・研究部・准教授
研究者番号：20454796